

中国の古墓壁画と日本の装飾古墳

Mural Paintings in Early Tombs of China and Decorated Tombs of Kofun Period Japan

西嶋定生

- ① 唐代の古墓壁画
- ② 唐代以前の古墓壁画
- ③ 画像石墓と画像磚墓
- ④ 後漢から魏晉時代の壁画墓
- ⑤ 中国古墓壁画と日本の装飾古墳

【論文要旨】

中国の唐代の古墓壁画は、侍男・侍女・儀仗・出行・狩猟・遊戯・舞女・宴飲など貴族の日常生活を描いたもので、それは墓主の生前の生活を描いたものと理解されている。しかし、それらの古墓には辟邪の意味をもつ四神が描かれており、墓室は現世から隔離された死者の住む小宇宙を示すものと考えらるべきであろう。このように死後の世界の人びとが現世の世界の人びとと同じ姿で描写されていることは、死後の世界が現世と同じ構造をしていると理解されていたことになる。このことは日本の装飾古墳が示す死後の世界や仏教思想の示す死後の世界とは著しく相違している。

中国ではこうした墓室壁画は春秋・戦国時代から出現していたと考えられる。そして漢代には壁画や磚刻画・石刻画の実例が数多く知られている。それらには現世の生活を示すものとともに、四神のほか方相氏などの神怪が描かれる。また墓主昇仙の姿を描いたものもあり、あるいは駕龍昇仙してこの小宇宙に到来したことを示すものかも知れない。さらにさまざまな故事物語りを題材にした壁画もみられるが、それらもまた当時の人びとの日常生活の中に融合していたものであろう。こうした漢代の古墓壁画は、神怪の性格が濃厚なようであるが、それは神怪そのものが現世的な存在であり、現世そのものが神怪と共存する世界であったからである。墓室内に納められたさまざまな明器類もまた、死後の世界が現世と同質的な世界であったことを示すものにほかならない。

こうした中国の古墓壁画に対して日本の装飾古墳の壁画の示すものが何であるかを理解するのは簡単ではない。ただ、そこには明器の類いの副葬はみられず、死後の世界が生前の世界とは異質であったことを示唆している。装飾古墳の壁画や刻文は、まさにそうした死後の世界を表現しているのではなかろうか。